

『スケベゲーム祝勝会』のサンプル

著者：金目

目次

登場人物紹介

第一話 尻文字対決

(サンプル掲載はここまでとなります)

(以下、製品版収録)

第二話 チンポ輪投げ

第三話 金玉根性試し

第四話 ザーメン重量対決

第五話 シックスナイン対決

第六話 アナルミサイル飛距離対決

第七話 バイブ耐久対決

【あらすじ】

かつての不仲を乗り越え、全国大会で優勝した太根大学サッカー部。

勝利の喜びに沸き立つサッカー部員たちに、椎名監督が告げる。

「祝勝会の余興として、健斗と亨に皆を楽しませてもらう」

そうして、健斗と亮はスケベゲームで対決する。

敗者への罰ゲームが何なのかも知らされないままに。

【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。無断転載・私的利用の範囲を超えた共有など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いいたします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いいたします。

登場人物

箕輪勇樹（みのわ ゆうき）

18 歳。男。太根大学サッカー部マネージャー。

赤城健斗（あかぎ けんとう）

21 歳。男。元太平大学サッカー部部長、現太根大学サッカー部部長。童貞。
平常時 7.7cm、勃起時 21.6 cmの勃起時も皮被りの仮性包茎チンポ。亀頭は黒い。

笹原亨（ささはら とおる）

21 歳。男。元根岸大学サッカー部部長、現太根大学サッカー部副部長。童貞。
平常時 5.3cm、勃起時 14.4 cmのずる剥けチンポ。亀頭はピンク色。

椎名勝平（しいな かつぺい）

38 歳。男。太根大学サッカー部監督。
祝勝会の余興として、健斗と亨にスケベゲームをさせる。

第一話

太根大学サッカー部専用の講堂は熱気に包まれていた。

太根大学サッカー部は今季の全国大会を制し、見事に優勝したのだ。

サッカー部には未成年の部員もいるため、テーブルの上に置かれた飲み物はノンアルコールのみであったが、サッカー部部員たちは、優勝という美酒に酔いしれているようであった。

そんな中、マネージャーの一人である箕輪勇樹は空になった皿を片付け、届いたケータリングの料理を並べてと、忙しく過ごしていた。

サッカー部部員たちは、よく飲み、よく食べるため、勇樹たちマネージャーが一息をつく余裕はまだまだ先のようなのだ。

だが、勇樹はそのことを嫌なことだとは思わなかった。

マネージャーとして応援しているだけとはいえ、所属するチームが優勝したのだ。

その歓喜の炎は勇樹の胸にも燃えているのだ。

そんな歓喜に包まれた講堂に手を打つ音が大きく響いた。

「さて、そろそろいいかな」

このサッカー部の監督である椎名監督がサッカー部部員たちに声をかけた。

「お前たち、今季の大会はよく頑張った。

かつての大学の垣根を乗り越え、一丸となって試合に挑んだからこそ、この結果を得られたのだと俺は考える」

椎名監督の言葉に、勇樹はほんの少しだけ、後ろめたさを覚えた。

この太根大学は、太平大学と根岸大学という二つの大学が合併した大学なのだ。

それゆえ、サッカー部もかつての大学の派閥が根強く残り、椎名監督の奇策がなければ、その垣根を乗り越えることは難しかっただろうと勇樹は考えている。

その「奇策」において、勇樹は中心的な役割を果たした。

部長である健斗と副部長である亨を辱める役割を担ったのだ。

その時の記憶は、勇樹にとって高揚とほんの少しの後ろめたさを伴う。

体育会系にとって、上下関係は絶対だ。

椎名監督の指示とはいえ、その上下関係を破り、健斗と亨を辱めたことは、勇樹にとって忘れがたい思い出になっている。

団結の為だったとはいえ、勇樹は興奮したのだ。

「さて、祝勝会には余興が必要だろう」

椎名監督の言葉に、勇樹はぎょっとした。

そんな話は事前には聞いていない。

慌てて周囲のサッカー部部員やマネージャーの顔を見るが、皆、驚いた様子を見せている。

余興と言われても勇樹は特に芸事に秀でているわけではない。

こういう場合、マネージャーが何かしないとイケないのだろうか？

初めての、そして、突発的な事態に勇樹は混乱した。

「まあ、事前に準備をしたら驚きがないからな」

椎名監督が大きく頷いた。

「皆を労う意味でも、健斗、亨、このサッカー部の頂点に君臨するお前たちが、皆を楽しませるべきだろう」

「え！」

「俺ですか！」

椎名監督の言葉に部長である健斗と、副部長である亨が驚いた声を上げた。

勇樹は、己が何か芸を見せなくてはいけないわけではないことに安堵し、突然の無茶ぶりを振られた健斗と亨に同情した。

「ああ、心配するな。

そんな難しいことは要求しないさ」

椎名監督が笑みを浮かべた。

「誰にでも簡単にできることで健斗と亨には勝負をしてもらう。

勿論、勝負であるからには敗者には罰ゲームを用意してある」

「どんな罰ゲームなんすか？」

健斗の問いかけに椎名監督がにやりと笑った。

「それは勝負が決してからのお楽しみだ」

「こっえー」

「……負けられないな」

椎名監督の言葉に、健斗がおどけてみせ、亨が重々しく頷いた。

「まあ、勝負を眺めるだけでは、お前たちも面白くないだろう。

だから、お前たちには別に余禄を用意してある」

椎名監督がサッカー部部員やマネージャーたちを見回した。

「健斗と亨の勝敗を最後まで的中させた者には、褒美がある。

だから、一生懸命頑張って勝敗を中ててみせろ」

「おおー」

「なんだろうな、褒美って」

「ワクワクしてきたな」

椎名監督の言葉に、サッカー部部員やマネージャーたちが沸き立つ。

勇樹も、ドキドキしてきた。

予感がしたのだ。

椎名監督は健斗と亨に恥ずかしい勝負をさせるつもりなのだ、と。

あの時のような興奮を味わえるだけでなく、勝敗を最後までの中させれば褒美がある。

頑張らなくては、と勇樹は思った。

「よし、では健斗、亨。

服を脱げ」

「やっぱりなー」

「……分かりました」

椎名監督の言葉に健斗が笑い、亨が渋々といった様子で頷いた。

そして、健斗が服を脱ぎ始めた。

浅黒い肌にラテン系の顔立ちをしている健斗は、大学の内外を問わず、人気がある。

だから、童貞などとっくに卒業しているものだと勇樹は考えていたのだが、スケベゲーム交流会の時の告白によれば健斗は童貞だという。

あんなイケメンスポーツ選手でも童貞を卒業できないのか、と勇樹は驚いた覚えがある。

てきばきと服を脱ぎ、パンツ一枚になった健斗は男の色香に溢れていた。

俊敏さと持久力をバランスよく兼ね備えたしなやかな筋肉は浅黒い肌と合わせて黒豹のような魅力に溢れており、ノンブランドの白ブリーフをブランドものの下着のように魅せている。

白ブリーフのもっこりも大きく、シヨンベンの染みもない。

そのまま外へ歩きだせば、変態ではなく、下着のCM撮影と思われそうなほどの色気があるのだ。

健斗が白ブリーフに手をかけた。

白ブリーフの腰ゴムから、黒々としたチン毛が覗く。

そのまま健斗が白ブリーフを脱いでいくと、平常時7.7cmの仮性包茎チンポが露わになった。

健斗のチンポは陰茎が長く、金玉も大きい。

巨根なのだ。

白ブリーフを足から引き抜いた健斗が腰に手を当てて、ぶるりんぶるりと腰を振ってチンポを揺らした。

そのおどけた様子にサッカー部部員が笑い出す。

「そんなに、俺のチンポは面白いか！」

「面白いです！」

「面白いぞ！」

「いよ！ 皮被り！」

健斗のチンポ振りにサッカー部部員やマネージャーたちが歓声を上げる。

健斗はそんな様子に満足げに頷いている。

続いて、亨が服を脱ぎ始めた。

ゴールキーパーとして、立派な体躯で太根大学のゴールを守護している亨の肉体は、がっしりとした重々しさに満ちており、山岳を彷彿とさせる雰囲気漂わせている。

その顔は眉が太く、力強い顔立ちをしており、大和男児としての魅力を備えていた。

そんな亨が黒のボクサーパンツ一枚の姿になった。

亨のもっこりは、健斗の白ブリーフのもっこりに比べると小さかった。

すぐに脱いだ健斗に対し、亨はボクサーパンツに手をかけたまま、動きを止めている。

「どうしたよ、亨？」

健斗が亨に問いかける。

「早く脱げよ、亨」

「亨先輩のチンチン、見せてくださいよ」

サッカー部部員たちも亨に全裸になることを要求する。

勇樹は、無理もないと思った。

亨は、チンポにコンプレックスがあるのだ。

隣に立つ健斗が巨根ということもあるが、亨のチンポはその立派な体格との対比のせいで短小に見えるのだ。

健斗と違い、ずる剥けという点では勝っているが、亨はそんな己のチンポを健斗のように気軽には見せたくないのだろう。

「どうした、亨？」

全裸にならないと不戦敗にするぞ？」

椎名監督の言葉に、亨が諦めたかのように息を吐いた。

そして、ゆっくりとボクサーパンツを下した。

黒々としたチン毛に紛れるように平常時5.3cmのずる剥けモブチンポが露わになった。

数値としては平均かつ平凡なチンポなのだが、亨の不幸は立派な体格を備えていることであった。

ゴールキーパーとしてはメリットしかないがっしりとした大柄な体躯は、チンポを魅せるという点においてはデメリットしかない。

その立派な体躯に比べると、亨のチンポはどうしても短小に見えるのだ。

黒のボクサーパンツを脱ぎ捨てた亨は恥ずかしそうに顔を赤らめて俯いた。

笑顔でチンポを見せびらかす健斗と、恥ずかしそうに耐えている亨。

二人が並ぶことにより、それぞれの魅力が増しているように勇樹には思えた。

「では、最初の勝負を伝える」

椎名監督がサッカー部部員やマネージャーたちを見回した。

「尻文字だ」

椎名監督の言葉に講堂内が笑いに満たされた。

勇樹も思わず笑みを浮かべた。

イケメンと男前である健斗と亨が、尻を振って文字を書くのかと思うと二人の男の魅力が高いだけに、滑稽さが際立つようなのだ。

「俺が指定した文字を健斗と亨には書いてもらう。

そして、先にその文字を解読してもらった方が勝者だ」

「なるほど、分かりやすい！」

「……尻文字」

面白そうに笑う健斗とは対照的に、亨は憂鬱そうな顔をしている。

陽気で開けっぴろげな健斗に比べて生真面目な亨は、こうした悪ふざけの類が苦手なのだろう。

「それで、お前たちにはどちらが先に解読してもらえるかを、賭けてもらう。

俺が集計をするから、今から回した紙に自分の名前と勝者の名前を書いて、畳んで俺に渡すんだぞ」

「「押忍！」」

椎名監督の説明にサッカー部部員やマネージャーたちが大きく返事をした。

投票用紙を受け取りながら、勇樹はどちらに賭けようか考えた。

さほど悩むことなく、勇樹は健斗に賭けた。

この状況を愉しんでいる健斗に対して、亨は恥ずかしがっている。
その二人の態度の差は尻の動きの大きさ、即ち、解説のしやすさに影響すると思ったのだ。

「では、二人でじゃんけんをして、勝った方が先行だ」

「じゃんけん」

「ぽん」

椎名監督の言葉に合わせて、健斗と亨がじゃんけんをした。

健斗がぐー、亨がぱーだ。

「では、亨からだ」

「押忍」

亨が講堂のステージの中央に立ち、背中を向けた。

亨の背中ががっしりと分厚く、筋力トレーニングをしていると鬼の顔が見えそうなほどだ。

亨が腰に手を当てて、日に焼けていない色白の尻を突き出した。

亨の尻は大きかったが、雄肉がみっしりと詰まっているのでだらしなさを感じさせない。

尻には尻毛が生えており、男らしさを強調していた。

「参る」

亨が尻を動かし始めた。

恥ずかしさがあるのか、亨の尻の動きは小さく、勇樹には何を書いているのか分からない。

多分、二字の言葉ではないかと思うのだが、尻の動きの止まるタイミングから考えるに四文字かもしれない。

「わっかんねーぞ、亨！」

「米粒に写経しているんですか、亨先輩！」

「もっとケツを動かせよ！」

サッカー一部部員たちが亨の尻文字を揶揄する。

「よし、分かった奴はいるか？」

椎名監督の問いかけに、勇樹を含めたサッカー一部部員たちは首を振った。

亨の小さな尻の動きでは分かるはずがないのだ。

「じゃあ、次は健斗の番だ」

「うっす！」

椎名監督の言葉に、健斗が舞台の中央に立ち、尻を向けた。

健斗の身体は亨の身体に比べると小柄だが、その代わりに野性味を帯びたしなやかさが際立っている。

健斗の尻はきゅっと小さく窄まっているが、雄肉が詰まっているため、貧弱さを感じさせない。

健斗は浅黒い肌をしているので、尻肉も浅黒く、肌の色では尻と腰の境界が見当たらない。

そして、健斗の尻は綺麗なもので、亨と違ってケツ毛も生えていない。

健斗が腰に手を当て、尻を突き出した。

健斗の股の間には健斗の巨根がぶらんと垂れ下がっている。

「行くぞ！」

健斗が大きく尻を動かし始めた。

その動きに合わせて、股の間で巨根がぶらんぶらんと揺れる。

膝を駆使して大きく動くので、最初のサンズイの動きは勇樹にははっきりと見えた。

だが、サンズイの隣がよく分からない。

健斗の尻の動きから二文字の熟語のようなのだが、思い当たる文字がないのだ。

「よっし、分かったよな」

健斗が尻を向けたまま、サッカー部部員たちに問いかけた。

「わっかんねーよ、健斗！」

「チンポが気になって分かりませんでした」

「チンポでかすぎなんだよ！」

サッカー部部員たちが健斗の言葉に野次を返す。

「じゃあ、回答する奴はいるか？」

椎名監督の問いかけに、サッカー部部員たちが首を振った。

「じゃあ、また亨に戻るぞ」

椎名監督の言葉を受けて、亨が再び舞台の中央に立った。

亨が腰に手を当て、ケツ毛の生えた尻を突き出す。

そして、先ほどよりもやや大きな動きで文字を書き始めた。

だが、恥ずかしさからだろうか、文字を書く動きが速いので、勇樹には何を書こうとしているのか分からない。

「早すぎるぞ、亨！」

「尻文字早漏亨！」

サッカー部部員たちが亨の尻文字を揶揄する。

亨は恥ずかしいのか、全身が真っ赤になり、突き出した色白の尻もほんのりと赤く染まっている。

「で、分かった奴はいるか？」

椎名監督の問いかけに勇樹たちは一斉に首を振った。

画数が多いということもあるが、亨の尻文字が早すぎて判別が難しいのだ。

「それじゃあ、健斗の番だ」

「おっす」

椎名監督の言葉に、再度、健斗が舞台の中央に立った。

「俺の尻をよーく見ろよ」

健斗が腰に手を当ててゆっくりと尻を動かし始めた。

サンズイは既に分かっている。

だが、その隣がよく分からない。

そして、二文字目が何かは勇樹には分かった。

この動きは乱だ。

だが、何が乱れるのだろうか……

「よし、じゃあ回答をする奴はいるか？」

「はい！」

椎名監督の言葉にサッカー部部員の一人が手を上げた。

「よし、答えてみろ」

「巨根です！」

サッカー部部員の言葉に椎名監督も含めたこの場にいる全員が笑い出した。

「そいつは尻文字の内容じゃなくて、健斗のチンポだろうが！」

「まあ、健斗のチンポがでかすぎて文字が頭に入らないのはあるよな！」

「縮んでください、健斗先輩のチンポ！」

サッカー部部員たちがやいのやいのと騒ぎ出す。

「俺のチャームポイントに何という言い草だ、お前ら！」

健斗の言葉にサッカー部部員たちが更に笑いだした。

「はいはい」

椎名監督が手を叩いて、皆を黙らせた。

「今回も正答者なしということで、亨の番だ」

「押忍」

椎名監督の言葉に、亨が舞台の中央に立った。

そして、腰に手を当てて、ケツ毛の生えた尻を動かし始めた。

小さすぎて読めない。

早すぎて読めない。

過去の苦情を踏まえたのか、亨は羞恥に赤く染まった尻をゆっくりと動かしている。

だが、恥ずかしさが尻遣いに現れているのか、尻の動きが荒いので勇樹には男という文字しか読み取れなかった。

二文字目は画数が多いということは分かったが、それでは回答できないし、そもそも、勇樹は健斗に賭けているので、分かったとしても回答する気はない。

「よし、分かった奴はいるか？」

椎名監督の問いかけにサッカー部部員の一人が手を上げた。

「よし、答えてみろ」

「男根です！」

いや、違うだろう、と勇樹は思った。

根という字よりも画数が多いように勇樹には見えたのだ。

「残念、一文字目しかあっていないな」

椎名監督の言葉にサッカー部部員が落胆した様子で座った。

「まあ、男根はないよな！」

「亨先輩のチンポで男根はないっしょ」

「だよなあ」

サッカー部部員たちが間違えたサッカー部部員を慰める体裁で亨のチンポを揶揄する。

亨はその言葉に屈辱を覚えたのか、男らしい厳めしい顔を真っ赤にしている。

「よし、次は健斗の番だ。」

そろそろ正答者が出るんじゃないか」

「うっす」

椎名監督の言葉に、健斗が舞台の中央に立った。

「俺のチンポに気を取られずによく見ろよ」

「チンポ縮めてから言えー！」

「デカチン！」

健斗の言葉に野次が飛ぶ。

健斗は不敵に笑うと、腰に手を当てて尻を向けた。

そして、ゆっくりと大きく文字を書き始めた。

最初はサンズイ。

これはもう分かっている。

問題はこの次だ。

右上から斜めに払い、ちょんちょんちょんと点が三つ。

そして、もう一度払い、横棒、縦棒、横棒と続く。

そして、乱の字だ。

勇樹は健斗の尻の動きを頭の中で反芻する。

唐突に、勇樹の頭に文字が閃いた。

もう一度、頭の中で確認をする。

右上から斜めに払い、ちょんちょんちょんと点が三つ。

そして、もう一度払い、横棒、縦棒、横棒と続く。

やっぱりそうだ。

この字に間違いがない。

「では、分かった奴はいるか？」

「はい！」

椎名監督の問いかけに勇樹は手を上げた。

「よし、答えてみろ」

「淫乱です！」

確信をもって勇樹が回答すると、椎名監督がにやりと笑った。

「よくできたな、正解だ」

椎名監督の言葉にサッカー一部部員たちが拍手をした。

「よくやったな、勇樹」

「よっしゃ、これで一勝目」

「あああ、亨に賭けたのが間違いだった」

サッカー一部部員の悲喜こもごもが講堂に響き渡る。

「では、最初の勝負は健斗の勝ちだ。

よくやったな、健斗」

「ありがとうございます！」

椎名監督の称賛に、健斗が頭を下げた。

勇樹は、一勝目を勝ち取ったことに満足していた。

このまま、勝者を当て続ければご褒美が貰えるのだ。

その褒美はきっと、素晴らしいものだという予感が勇樹の心を占めていた。

奥付

『スケベゲーム祝勝会』のサンプル

初出：2022年10月30日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep